

# 特別寄稿 高尾山薬王院と 薬師如来信仰・前編

八王子市 石井 義長

一、薬王院と薬師如来  
高尾山薬王院有喜寺の御本尊は飯縄大権現とされ、その像は大本堂左横の階段を上がった鳥居の奥にある、壮麗な権現造りの御本社と呼ばれる飯縄権現堂に祀られ、また大本堂内の内陣にも、平成二十七年五月に新しく造立された、御前立御本尊様が安置されています。大本堂には、「開山本尊・薬師如来と中興本尊飯縄大権現を安置している」と紹介した本（相原悦夫『高尾山薬王院』百水社・平成十二年）もありますが、現状では薬師如来は秘仏とされ、参詣者は薬王院での像に参拝することはできません。高尾山薬王院の歴史については、江戸時代中期の寛延二年（一七四九）に筑波の人、石島正猷が

書いた『高尾山縁起』が最も詳細な典拠として知られていますが、そこには奈良時代の天平十六年（七四四）に、行基菩薩が武蔵国高尾山を開き、自から薬師如来を刻んで祀り、寺号を有喜寺、院号を薬王院と名付けたとあります。

大阪や奈良などの近畿地方を中心に活躍した行基（六六八〜七四九）が実際に高尾山に来たかどうかは別にしても、行基には天武天皇（六七三〜六八六在位）の勅願によって開創された、奈良薬師寺の師僧を務めた経歴があり、また薬師如来は日本仏教の最初期から広く尊崇されて来たもので、奈良時代に高尾山薬王院が、薬師如来を本尊として開創されたという伝承は、納得できる由緒と考

えられます。

薬師如来はその名前の様に、「諸病を除き、衆生に身心の安楽を与え、玄奘訳『薬師琉璃光如来本願功德経』が代表的な經典で、東方の淨瑠璃仏の教主とされ、ひろく病氣平癒の功德ある仏として、信仰されてきました。そして、薬師如来像には、白鳳時代の法隆寺講堂や薬師寺金堂をはじめ、延暦寺根本中道、醍醐寺薬師堂、神護寺金堂などの本尊仏（いづれも国宝）として、日本の仏教美術を代表する、優れた作例が多く、関東地方でも千葉県の印旛沼北方にある龍角寺に、アルカイックスマイルな慈眼を備えた七世紀後半の白鳳仏が伝わっており、それは行基より数十年前の時代に当ります。

行基が命名したと伝わる、高尾山の「薬王院」とは、言うまでもなく薬師如来を祀る寺院ということで、薬師寺、薬王寺、医王寺、淨瑠璃寺、瑠璃



秘仏である薬師如来の代わりに、御前立本尊として拜むことができる薬師三尊仏龕(大本堂内陣)

光寺、東光寺など、五来重氏によれば、「山にも野にも町にも、そして海岸にも薬師寺。薬師堂は存在」し、「日本では薬師如来ほどポピュラーな仏は無い（『薬師信仰』雄山閣・昭和六十一年）」といえます。その薬師如来の御姿が、現在の高尾山内では拝見できないのは、一体どうしてなのだろうかというのが、老生のごく素朴な疑問です。

高尾山薬王院の御本尊とされている飯縄大権現については、周知の様に『高尾山縁起』によれば、南北朝時代の永和年間（一三七五〜一三七九）に京都醍醐寺で受法した俊源大徳が来山して、八千枚の護摩を修して、飯縄権現を感得し、異人の刻したその霊像を祠に安置したのに始まるとされています。

行基から俊源までの六

三一年間の歴史については何もわからないようですが、中興開山とされる俊源大徳以降については歴代山主名も伝わり、法政大学の『高尾山薬王院文書』や外山徹氏の『高尾山薬王院の歴史』（ふこく出版・平成二十六年）などによって、歴史的な推移を追うことが出来ます。

その間の最古の文書とされるのが、『文書』一号の小田原北条氏・三代当主氏康の書状です。永禄三年（一五六〇）十二月「薬師堂別当」に宛てたその文書には、「高尾山薬師堂修理のため、武蔵国一所を寄進する。不断に勤行して本意を願ってほしい」とあって、上杉謙信の小田原攻撃を前に、戦の勝利を祈願して寺領を寄進したもので、武將の守護神とも言われる「飯縄権現」の名は、ここには記されていません。

また、氏康の次男で八王子城主の北条氏照が、

天正三年（一五七五）十一月に高尾山に掲げた制札では、高尾山の本尊の御開帳に参詣する人々に、寺内で押し売りや喧嘩、口論等をする者は罪に処すと制していますが、開帳された御本尊名は示されていません。

当時の薬王院境内の賑わいと庶民信仰の広がりが見え、その頃には、高尾山とされる文書には、「薬師山」という言い方がいくつかあって、外山徹氏は「この頃の高尾山の本尊は薬師如来という認識が強かった」と解しています。

## 二、薬師仏と飯縄神

後北条氏が亡びようとする天正十八年（一五九〇）六月、高尾山の北方四キロにあった八王子城は豊臣秀吉軍の攻撃で落城し、薬王院も多大な被害を受けたはず。後北条氏の指示により八王子城内で敵軍敗退の祈禱を行ったという第八世源実が、江戸時代初めの元

和元年（一五一六）に書いた『高尾山薬師堂修造勸進帳案』(文書八十四)は、十方有縁の檀那の助成を受けて薬師堂を修造し、一切衆生の現世の安穩と後生善処（死後には極楽往生すること）を祈るといふ目的を掲げて、次のように述べています。

靈地である高尾山には伽藍があり、本尊の薬師如来像は草創以来多年を経た。前代には金銀をもって磨かれた堂塔と、千余りの坊があったが、今は断絶して一院に四、五の僧があるのみである。木の實をむさぼって朝の飢えをやすめ、水を飲んで夕べの疲れをいやし、草葉を織って衣とし、茅葺を編んで蓑とし、肘を杖として臥す。中でも本尊は雨にさらされ、鳥や鴉の尿糞に汚され、終には鍋釜の薪とされるほどである。

このような状況の中で、この源実山主の祈願は、二代後の第十世山主堯秀の

時代に成就したよう、で薬王院発行の『不動堂修理工事報告書』(平成十二年)によれば、寛永年間（一六二四〜一六四四）には薬師堂は再建され、仁王門、大日堂、護摩堂も建立されたといえます。

そして、俊源大徳と同じく醍醐寺で受法した堯秀山主が、寛永八年（一六三一）三月に書いた薬王院の梵鐘を鑄造するための『勸進帳案』(文書四十一)には、「高尾山は薬師如来の垂迹（おわします所）で、愛宕飯縄神の鎮護する所である。仏と神は徳を同じくする故に、参詣する者は諸願を満足しない者はない」とあり、本尊薬師仏と、

これを守護する飯縄神とが一体として、高尾山の信仰の拠り所となっている事が述べられています。下つて第十六世秀憲山主の時代には、『工事報告書』によれば、享保十四年（一七二九）に現存の飯縄権現堂の本殿が建

立されたのに次いで、その幣殿と拝殿も整備されました。

この代の寛延二年（一七四九）に書かれている『縁起』は山内の諸堂について、中央には「南面して薬師堂があり、大日堂と護摩堂がその左右にあつて、飯縄社はそれらの西北の隅にある」と記されています。その配置の様子は、『高尾山報』六一六号（平成二十七年五月号）で外山徹氏が紹介しているように、江戸時代後期の『新編武蔵国風土記稿』に記載され、天保七年（一八三六）頃の『八王子名勝志』に示されています。

そして、『縁起』の末尾には韻文の辞があつて、「医王(薬師如来)を祀り、靈廟は新なり・百霊を懐柔し、飯縄神に及ぶ」と記され、薬師如来が高尾山の主宰者とされている趣が感じられます。

(仏教研究者)  
(次号へ続く)